

# 新米教師 1 年目の振り返り

嶋田 剛（旭川市立春光台中学校 教諭）

## はじめに

◎所属学年：1 学年副担任 教科：国語 分掌：生徒指導部

教師としての一年目はまさに「右も左もわからない」という状況だった。それまでの現場経験はほぼ教育実習だけという状態で現場に入り、学校における動きや先輩教師の会話に出てくる言葉の意味すらわからないこと度々あった。そのようなまだまだ至らない点ばかりの私であるが、教師として次の二点については昨年度意識してできたことである。

「生徒との関わりをいかに持つか」  
「自分を変え、成長するためにどうするか」

この 2 点に焦点を絞り、1 年目を振り返りたいと思う。

### 1. 生徒との関わりをいかに持つか

出勤した初日。始業式もまだ始まらない中、最初に先輩教師から言われたことは「何もしなくていいよ」であった。着任式が済んでいないから、生徒と関わる訳にもいかない。副担任として入ったため、特にやるべきこともないのだと。仕方なく、職員室でひたすら授業案を作成し、機会を窺っては担任の準備の手伝いをさせていただいた。

そうして数日を過ごし、いよいよ始業式・着任式を終え、生徒と関わる日々がスタートした。ようやく生徒と関わる機会を得たからにはとにかく積極的に行動しようと思い、以下の取り組みを行った。

#### (1)挨拶・掃除

まず私が始めたことは朝の挨拶と学年フロアの掃除だった。少しでも生徒と関わる機会を増やしたい思いで、毎朝廊下に立った。

朝の挨拶では、多くの生徒が元気に挨拶をしてくれ、ちょっとしたことから相談事まで色々な話をするきっかけになった。私の所属する春光台中学校は「旭川一の挨拶」を目指すという目標を抱えており、結果的に学校全体の取り組みとも共通したのは良かったと思う。

掃除は基本的に廊下のモップがけを行った。しばらくは何もなかったが、2 か月を過ぎたあたりで男子を中心に何人かの生徒が興味を示し、一緒に掃除をしてくれた。しかし、2 学期になると興味がなくなったのかそうしたことも無くなった。単純に副担任として、自分の教室を持たない私が個人的に廊下を自分の担当場所のように感じ、掃除を始めただけだったが、やはりどこか残念な気持ちはあった。

そこから特に何もなかったのだが、2 学期の後半あたりから変化が起きた。朝、一人でモップをかけていると一人の女子生徒が「先生、掃除手伝います」と声をかけてきたのだ。その生徒はあまり口数が多いほうではなく、私自身もほとんど会話を交わした記憶のない

生徒だったため、驚いた。しかし、次の日も同様にその子は掃除をし、その次の日も同じことが続いた。そのうちに私が朝来るよりも早く、掃除を始めるようになった。その生徒は2年生になった今でも毎朝、学年のフロアのモップがけを行っており、ときには何人かの友達と一緒に継続している。

## (2)家庭学習へのコメント

本校では家庭学習の提出数に目標を定めて、生徒に取り組ませている。そのこともあって、例年に比べ生徒は家庭学習に精力的に取り組んでいる。そうなる嬉しい悲鳴ではあるが、こちらがチェックのする数が当然増える。限られた時間の中で、放課後までに全てを確認するのが難しい日もある。簡単にスタンプを押して済ませることもできるし、時間割の都合上どうしても無理な場合はスタンプを使用することもあった。だが、生徒が頑張っている以上、こちらもそれに応えなくてはと短くてもコメントを書いた。そうしたことを続けるうちに、普段はあまり多くの言葉を交わさないのだが、家庭学習のコメントの中では色々と言葉を交わす生徒も出てきた。実際、それが生徒にどのような影響を与えたかは検証することができなかったが、今年度も可能な限り継続していきたい。

## 2. 自分を変え、成長するためにどうするか

### (1)真似をする

先輩教師と比較して間違いなく経験が少ない。そのような中で生徒に教科・生徒指導をしている。そんな私がどうしたら少しでも力をつけられるのか。私の答えはまず、真似をすること。単純に先輩教師の優れた部分を盗んでしまうことが最善と考えた。幸いなことに、私は副担任としての立場で担任よりは時間に融通が利いた。そして先輩教師は皆親切で、私が学活や授業を見せてほしいと頼むと「いつでも見に来ていいよ」と言ってくださった。そのため、朝の会や帰りの会・国語や他教科の授業にたくさんお邪魔させていただいた。また、生徒指導の場面では、邪魔にならない程度に聞き耳を立て、どんな内容を話しているのか必死に聞き取った。

### (2)首を突っ込む

首を突っ込むというところかネガティブな印象もあるが、とにかくたくさんに関わることが重要だとこの1年間で感じた。

教員1年目の私にとって、知らない・わからないことはたくさんある。その中で、自分の目の前のわからないことに対して、質問することは当たり前だと思う。しかし、自分に本来関りのない他の分掌の仕事や職員室で聞くちょっとした生徒指導の問題などについても、積極的に聞く、または関わる。自分のやるべき業務とのバランスももちろん重要だが、そうした積み重ねが経験値の差となることを感じた。実際、他の事例を聞いておくことで、自分の目の前の出来事にとっさに指導できたことがあった。

## まとめ

最後に2年目となる今年度に意識したいことを挙げる。今年度に意識したいことは「先を見通した指導」の追求である。昨年度、副担任という立場から様々な学びの機会をいただいた。そして今年度は初めての担任となり、より生徒と直接的に関わる立場になった。そこで感じるのは、いかに先回りして指導を行うかということである。昨年度の経験も踏まえて、生徒に指導が通らない場合の多くは、教師の準備や対応の不足であると感じる。

生徒ではなく、教師側の問題が大きい。そうならない為に、いかに事前にきめ細かい指導を行うかが今後の課題である。

では、どうしたら先を見通して、丁寧な指導ができるのか。それは私自身が成長することしかない。例えば、ある指導場面において、その指導がなぜ必要なのか理由と具体例の二つを話せること。自分は気づいていないが、先輩教師が意識して行っていることに気付くこと。同じ失敗を再び繰り返さないよう記録すること。そうしたことを一つ一つ積み重ねていくより他にない。学生のころから師範塾で「学び続ける教師」という言葉を聞いてきたが、その意思を継続し、少しでも生徒に良い影響を与える教師でありたいと思う。